

日本研究・地域研究拠点 年縞を軸とした環太平洋文明研究拠点

Group Theme 環太平洋地域における人間＝環境関係の人類学的検討

先住民の民族誌から人間と環境との関係を解き明かす文化人類学

**文化人類学の視角から人間と環境の関係に迫り
環太平洋文明論の構築に寄与することを目指しています。**

人々の生活や生存をも揺るがす気候変動や自然災害が世界規模で頻発している現代、将来にわたって持続可能な世界を存続させていくために、人間の環境との関係を根本から問い直す必要に迫られています。「年縞を軸とした環太平洋文明研究拠点」では、環太平洋地域を対象として、さまざまな自然災害や気候変動と人類の文明の興亡との関係を解明することを目的としています。本研究拠点では、地球変動の足跡が刻まれた「年縞」を「歴史のものさし」として活用しながら、環境考古学、縄文考古学、災害地理学、文化人類学と多様な学問分野がそれぞれの研究成果を蓄積し、互いの知見を融合することで、自然と人間の関係により深く迫ろうとしています。

中でも文化人類学の視角からアプローチするのが、本グループです。民族誌の精緻な記録とフィールド調査によって、個別の小規模社会の中から世界や現代の断面を浮き彫りにし、個別社会という小さなスケールを超えて、現代そして、未来の文明を解き明かすカギを見出すところが、人類学の特長です。文化人類学という新たな光を当てることで、考古学や地理学だけでは見えてこない、総合的な「環太平洋文明論」の構築が可能になると考えています。

**北米先住民の神話で語られる表層を読み取る
レヴィ＝ストロースの業績を独自の解釈で理解したい。**

新たな文明論を構築するための手がかりとしてまず着目しているのが、現代人類学の頂点とも称される、フランスの人類学者レヴィ＝ストロース(1908～2009)の業績です。20世紀前半、レヴィ＝ストロースは南北アメリカ大陸の先住民に伝わる膨大な神話体系を精緻に分析しました。レヴィ＝ストロースの偉業は、こうした神話を単なる架空の物語ではなく、人間と環境との関係をどのように捉えていたかを示す「思考の枠組み」として読み直したところにあります。それまで誰も持ち得なかった新しい視点で神話を深く読み解き、自分たちを取り巻く「世界」を捉えるための科学や宗教、哲学を手にする以前の人間の世界観を明らかにし、人間と環境世界の関係について従来のビジョンを一新しました。

例えば、南北アメリカ先住民が語った神話には、重要なモチーフとして太陽と月をはじめとした天体がしばしば登場します。それら太陽や月にまつわる物語の中にレヴィ＝ストロースが見出したのは、天体の動きを見て自然界の周期性を知った先住民が、誕生から死に至る自分自身の生命の周期性を理解しようとしたことでした。神話ではまた、夥しい数の動物についても語られており、先住民が人間と動物の関係をどのように位置づけていたかを推し量ることができます。

こうした神話から読み取れる思考の枠組みと自然への接し方には、今日

の人間が失ったかも知れない謙虚さが現れています。本グループでは、そうしたレヴィ＝ストロースの業績を独自の視点で読み直し、人間と環境との関係について新たな理解を得たいと考えています。

また、レヴィ＝ストロースは、神話分析の後期の業績で、先住民たちがどのように火を獲得し、料理や器といった文明の技を獲得したかについて、『やきもち焼きの土器づくり』で述べています。これらを分析することで、同じく土器製作文明であった縄文人の世界観を新たな解釈で理解することも可能になります。

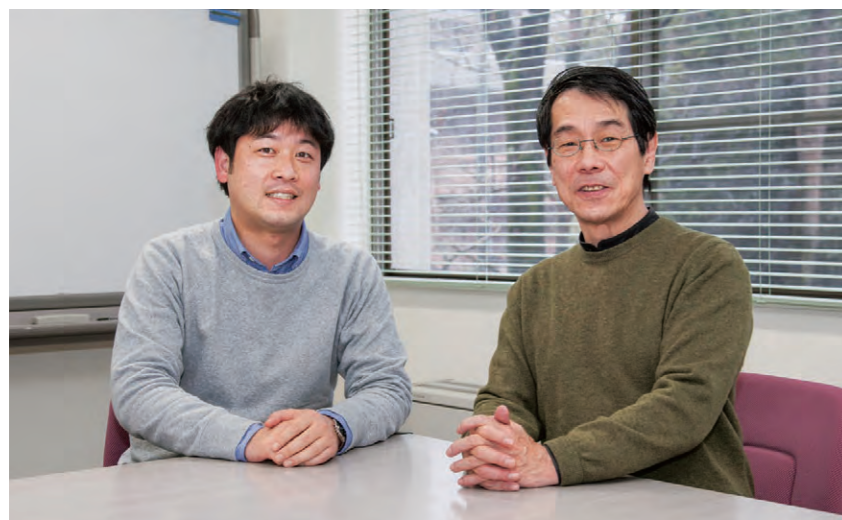
**北南米の先住民の現状をフィールド調査し
現代の先住民と環境との関係を明らかにしています。**

先住民の住む場所や暮らし、環境との関わりは、時代を経てさまざまな変容を遂げています。本グループでは、レヴィ＝ストロースの業績をはじめとした文献を読み直すことに加え、さまざまな地域でのフィールドワークを実施し、現代に生きる先住民の現状と環境との関係、その歴史の変遷について研究しています。その一環として、2014年8月、カナダに赴き、北米先住民の一つイロクォイ連合のリザーベーション(居留地 The 6 Nations Reserve)で、環境保全の現状を調査しました。今後さらに追跡調査を試み、先住民とアメリカを建国した入植者たちとの関係の歴史の研究を続ける予定です。

各地のフィールド研究や民族誌の記録には、若手研究者が積極的に関わっており、人材の育成の機会としても有意に機能しています。若い協同研究者のひとり、カナダのイロクォイとは別の先住民のリザーベーションで、この地域で発生した有機水銀汚染の問題に関心を寄せています。オタワにある国立公文書館、およびトロント大学を訪問し、秘密裏に記されたリザーベーションに関する行政文書の存在や、先住民を国内法の枠組みで扱うようになった経緯を突き止め、先住民と、後に築かれた国や地域の行政との関わりを詳らかにしようとしています。またオンタリオ州では、二つの先住民のリザーベーションを訪問し、代表者、有力者をはじめとした住民に対するインタビュー調査を実施しました。

もうひとりの若手研究者は、南米パナマ東部地方の先住民の暮らすエンペラ特別区に滞在し、当該地域における森林利用の現状を調査しました。先住民が実施する森林開発の中で起こっている問題を捉え、現代の先住民と森との関係性について考察しています。

人間と環境の関係を把握するには、思想体系を理解するだけでは十分とは言えません。神話の評価や民族誌の記録を通じて思考体系を解き明かすと同時に、環境考古学や縄文考古学、災害地理学など他の研究グループからも知見を得て、実際の暮らしや社会生活における物質循環という側面からも人間と環境の関係を明らかにし、その理解をより精緻なものにしていくつもりです。専門研究員の富田さんには乾燥地モンゴルの牧畜の研究によってこうしたテーマに寄与いただいています。



[写真 中央]
先端総合学術研究科 教授

渡辺 公三 グループリーダー

[写真 左]
立命館グローバル・イノベーション研究機構 専門研究員

富田 敬大



The 6 Nations Reserve近くのBrantfordの町にあるMohawk Chapelというアメリカ大陸でも最も古い木造教会のひとつでNew York州から移築されたもの(左) その傍らに眠るJoseph Brant (1742?-1807)の墓。町の名も、独立戦争のとき巧みなゲリラ戦でワシントン将軍を悩ませたこのモホーク族の戦士の長に因む(右)



モンゴルでのフィールド調査

- 参考文献/1『聞うレヴィ＝ストロース』渡辺公三著 平凡社新書(2009) 2『やきもち焼きの土器づくり』レヴィ＝ストロース著、渡辺公三訳、みすず書房(1997)
- 連絡先/立命館大学 衣笠キャンパス 渡辺研究室 電話:075-466-3233 立命館大学環太平洋文明研究センター <http://www.ritsmei.ac.jp/research/rcpp/>